○○×あなた♡

乙女ノベルシリーズ♡

Natsumina Novel

♡喘ぎ・濁点喘ぎ
触手／二穴攻め／3P

モブ令嬢に転生したかと思いきや、役がありました（触手の実験台です）

私／あなた
チートはないものの、モブに転生して幸せに暮らしていたが急に実家が傾く。奉公先で触手モンスターを見て自分が18禁ゲームの実験台令嬢だと気づいた。

クロード・シャリエ侯爵
シャリエ侯爵家の当主、研究大好きな科学者。このゲームの悪役令嬢を断罪するために触手を作り侍女として雇ったあなたを実験台にするドSメガネ男。

キュルベスター／キュルちゃん
クロードが作ったもちぷるな触手。キュルキュル喋る。クロードの教えを何でも素直に聞いてしまいあなたを快楽堕ちさせるモンスターと化してしまう。

目次

Ⅰ　モブじゃないと気づいたけど手遅れでした……3
Ⅱ　エッチな粘液で乳首イキさせられました……13
Ⅲ　クリを触手でしゅこしゅこ♡されて潮吹きました……27
Ⅳ　ダメ侍女すぎて口におチンポねじこまれました……38
Ⅴ　どちらの処女も触手に奪われちゃいました……47

モブ令嬢に転生したかと思いきや、役がありました（触手の実験台です）

Ⅰ　モブじゃないと気づいたけど手遅れでした

「遅い。侍女たるもの、呼び出しには迅速に応じたまえ」

「も、申し訳ありません侯爵様。御用をおうかがいいたします」

侍女としてシャリエ侯爵家に雇っていただき、本日は奉公初日。

当主のクロード・シャリエ侯爵に呼び出された今、私は少し動揺している。初対面にもかかわらず、ものすごく顔に見覚えがあるのだ。

すらりとした長身に、サラサラの銀髪。チェーンをつけたフレームの大きなメガネの奥には、切れ長の赤い瞳。そして血が通ってないんじゃないかと思うような肌の白さ。人間離れしているというか、人形みたいに整った容姿の侯爵様が、今日から私のご主人様だ。

魔法とモンスターが存在するゲームみたいな世界に転生して二十年余り。モブ令嬢として何不自由ない生活を送っていたけれど、急に実家が傾いた。

うちは三人姉弟。両親は下の子ふたりの世話だけで手いっぱいだろうと思い、私は働くことを決心。そこにちょうど、シャリエ侯爵家から「住み込みの侍女にならないか」とのお話をいただいたのだ。

この世界の貴族令嬢にとって、王族や高位貴族の侍女はそれなりにありふれたお仕事。とはいえ、実家が没落しかけている私がこんな良家で働けるなんて、すごくラッキーだ。初日からクビになるわけにはいかない。

私が頭を下げながら用件をたずねると、クロードはテーブルに置かれていた箱に手を伸ばした。

「君の仕事はこの子の相手だ。出ておいで、キュルベスター」

「キュルー」

クロードが開けた箱から紫色に透き通ったタコのような生き物がにゅるりと顔を出したのを見て、私はようやく気づいた。

（……はっ！　この世界、前世でやったことのあるゲーム!?）

キュルベスター―こと、通称キュルちゃん。私が前世でプレイしたことのある十八禁乙女ゲームに登場する、触手型モンスターだ。そして自分がモブ令嬢じゃないことにも気づいた。ちゃんと役がある。

ゲームのヒロイン（プレイヤーが操作する主人公）を暴漢に襲わせようとした悪役令嬢を秘密裏に断罪してほしいと王太子から依頼され、科学者のクロードは研究室で触手モンスターを製造。ヒロインを暴漢に襲わせようとしたのだから、触手に襲わせて悔い改めさせてやろうというわけだ。

で、私が登場するのは、触手に襲われるとも知らず屋敷にやってきた悪役令嬢に、クロードがキュルちゃんを紹介するシーン。

部屋に入ってきたキュルちゃんが楽しそうに触手を突っ込んでいた、名前も出てこない令嬢。粘液まみれになりながらイキまくり、一瞬にして悪役令嬢を震えあがらせたちょい役令嬢が……私だ。

（嘘でしょ？　気づくきっかけ、いっぱいあったのに）

転生したものの何のチートもない。けど、実家が裕福で良かったと思いながら、この年になるまで幸せに暮らしていた。「あれ？　なんか見覚えあるな？」と思うことが色々あったのに、深く考えずにのんびりと。

もっと早く気づいていれば、ゲームのシナリオを変えられたかもしれない。家が傾かないようにお父様に助言して、実家は裕福なまま。私もシャリエ侯爵家の侍女にならず済んだかもしれないのに……！

しかし、後悔したところでもう手遅れ。箱から出てきたキュルちゃんは、クロードの腕に抱えられて辺りを見回している。

「さあキュルベスター、彼女と一緒に遊ぼう」
「キュルルー」
（かっ、かわいい！）
前世、このゲームをプレイしていた私の推しは、王太子でもクロードでも他の攻略対象でもなかった。透き通ったもちぷるボディと、猫みたいな耳。そしてかわいい鳴き声。そう、キュルちゃんが私の推しだ。
ただ、断トツのかわいさとは裏腹に、責めはゲーム内で一番エグい。
悪役令嬢のざまぁ断罪シーンがちらっと出てくるんだけど、確か乳首とクリトリスを同時に弄りながら、オマンコとアナルに触手をじゅぼじゅぼ突っ込んでいた。キュルちゃんの粘液には感度を高める成分が入っていて、高飛車なご令嬢も即快楽堕ち。二穴乳首クリ責めで快感の虜になった悪役令嬢、オホ声をあげながらキュルちゃんの下僕に成り下がってたなぁ……

対して、私がキュルちゃんと一緒に出てくるシーンは本当に一瞬だったから、何をされた末にああなったのかはわからない。ただ、触手の実験用に雇われたのだと思うと、あの悪役令嬢と同じような責めを受けると見て間違いない。

「キュル……」

気づけばキュルちゃんが私を見上げている。縦に長い楕円形の瞳が、急に真っ赤なハートに変わった。

「キュルルー♡」

「おお、気に入ったならよかった。どこの馬の骨とも知れん女より、貴族令嬢の方が良いだろうと思ってな。わざと同じ事業をぶつけた甲斐があった」

（ちょっとー!?）

実家が没落寸前になったのがクロードのせいだと判明。

いや、あんなに裕福だったのに、突然全部の事業が上手くいかなくなるって

どうもおかしいよなとは思ってたけど。お前のせいだったか……！

「侯爵様！　その話、詳しく――」

「キュル♡」

クロードに詰めよろうとしたところをキュルちゃんの触手でぐるぐる巻きにされ、私はベッドの上におろされた。

（きゃー!?　ファンサありがとうございまーす！）

もちぷるな触手がお腹の辺りに絡みついて、ここぞとばかりにぷにぷにと触ってしまう。想像していたより柔らかい。しかし適度に弾力もある。肌に吸いつくような魅惑の手触りですなぁ……ってこらこら。推しのファンサービスに一瞬我を忘れてしまった。

クロードは抱きかかえていたキュルちゃんを私の隣に優しくおろすと、ベッドの傍に置かれていた椅子に座って足を組んだ。

「キュルベスター。まずは遊びやすいようにしよう。両手を縛って、足は軽く曲げて左右に開かせるといい。アルファベットのMの形にな」
「キュルッ！」
（何教えてんのこいつ！）
キュルちゃんは生みの親であるクロードを大層慕っているらしく、クロードに言われた通り私の両手は胴体と一緒にぐるぐると縛られ、足をM字に開かされた。紺色のスカートがまくれ上がって、下着が見えてしまう。
「こ、こんな格好……」
「しまった、服を脱がせるのが先だったな……まあいいか。キュルベスター、服を破いても構わんぞ」
「キュルルー」
「いやっ！　やめてキュルちゃん！」

「キュルッ……!?」
私の言葉が通じたのか、こちらにのびてきていたキュルちゃんの触手がぴたりと止まった。なんだかおろおろしている。
「そ、そうよキュルちゃん。服は破いちゃ駄目なの」
「おい君。余計なことを教えるんじゃない」
「キュル？　キュルル？」
「いや、こいつの服は破いてもいい。パパの言うことを信じなさい」
「……キュルッ！」
何がパパだこの野郎と返す間もなく、キュルちゃんの手で胸元のブラウス生地がびりびりと破かれた。白いフリルのついたエプロンと紺色のスカート、下着もむしり取られて、あっという間に恥ずかしい格好に。おっぱいとオマンコが外気に触れて、肌がぞくりと泡立つ。

「キュルー♡」
「ああ。悪くない肉づきだな」
「いやぁ……見ないで……」
恥ずかしさでぎゅっと目をつむっていると、クロードの楽しそうな声が聞こえてきた。
「さあキュルベスター。好きに遊んでいいぞ」
「キュルルー」
こうして、私を実験台にした「悪役令嬢、触手モンスターで断罪作戦」の予行演習が始まってしまった。

Ⅱ　エッチな粘液で乳首イキさせられました

「あっ！♡　キュルちゃん……!?」

胸の辺りにむにゅっ♡という感覚を覚えて、私は思わず目を開いた。キュルちゃんの触手が私のおっぱいに絡みついている。

先の丸い触手で下からすくいあげるようにゆさゆさと揺らしたり、かと思えばおっぱいの根元に触手をぐるりと巻きつけてきゅっ♡と絞ったり。

柔らかいおっぱいが自分の手で形を変えるのが面白いのか、キュルちゃんはとても楽しそうに私のおっぱいで遊んでいる。

「キュルー♡」

「あっ♡　やぁっ……ん♡」

「素晴らしい。どう触れば喜ぶか本能で分かっているんだな。さすが我が息子」

椅子に掛けたクロードは、まるで授業参観に来た父兄のようにキュルちゃんを笑顔で見守っている。

自分が作り出した触手モンスターを我が子のように可愛がるのは百歩譲ってよしとして、実家を傾かせて連れてきた令嬢のおっぱいをかわいい息子さんに揉ませるパパってどうなんですか？

でも笑顔で見守りたくなる気持ちは、正直すごくわかる。私の胸をふにふにと揉んでいるキュルちゃん、ずっと上目遣いでかわいい。もちぷるな触手は胸に食い込んでも痛くないし、むしろ気持ちいい。

キュルちゃんが楽しそうに胸を揉んでいると、ふいに触手がちょんっ♡と私の乳首に当たった。

「っひ♡」

「キュル？」

うっかり声をあげて興味を持たれてしまった。キュルちゃんが私の反応を見るように、触手の先で乳首をつんっ♡つんっ♡とつついてくる。

「んっ♡　くっ……あっ♡」

「キュルルー♡」

これは良いところを見つけたぞと言わんばかりに、キュルちゃんは瞳を輝かせながら遠慮なく私の乳首を弄り始めた。

もちぷるな触手が乳首にぺとり♡と張りついて、くにっ♡くにっ♡と捏ね回されるのがたまらなく気持ちいい。でも、かわいいキュルちゃんにこんなエッチなことをさせるわけには……！

「っあ♡　きゅ、キュルちゃん、やめて♡　触っちゃ駄目っ♡」

「キュルッ!?」

よし。今ならまだ、キュルちゃんは私の話も聞いてくれるみたい。

クロードの教えでエロエロモンスターになってしまう前に、私が無害で優しい子に育てよう……

と思った矢先に、クロードがあることないこと教え始めた。

「キュルベスター―。こいつは『止めて』だとか『駄目だ』と言うが、反射的にそう言ってしまうだけで、実際は快感を覚えている」

「キュル？」

「すべて逆の意味に捉えればいい。つまり彼女は先程からずっと、お前に対して『もっとしてほしい』と懇願しているのだ」

「キュルキュル!!」

（違うよー!?）

キュルちゃん！　「なるほど!!」みたいな反応してるけど！　あなたのパパ、しれっとした顔で「もっとしてほしい」なんて嘘の通訳してるからね!?

焦る私をよそに、キュルちゃんは私の乳首を再びこりこりっ♡と弄り始めた。
「ひっ♡　キュル、ちゃん♡　やめてっ♡」
「キュルル♡」
駄目だ、全然やめてくれない。クロードのせいで、キュルちゃんは私が嫌がっても「もっとしてほしいんだ」と思っちゃってる。良かれと思って乳首ばっかりしつこく攻めてきてる……！
キュルちゃんから出ている触手はいつの間にか増え、二本の触手で乳首をつまんで円を描くようにくりっ♡くりっ♡と弄られている。つままれたままきゅっ♡とねじられ、私はたまらず喘ぎ声を漏らした。
「っん♡　ひっ……う♡」
絶妙な力加減でじっくりと刺激された乳首はピンと硬くなり、開かされていた足の間が熱をもつ。オマンコがじわりと濡れてきている。

「その調子だ。蜜で濡れてきた」
「キュル？」
「それが気持ちよくなっている証拠だ。お前に遊んでもらって、彼女は今とても喜んでいるというわけだな。仲良くなりたければもっと喜ばせてやるといい」
「キュルー♡♡」
純真すぎて早くもクロードに洗脳されてしまったキュルちゃん。私の目の前には新しい触手がやってきた。先が筒みたいになっていて、その先端が私の頬にぷにゅっとあてがわれる。
「キュル♡」
「あっ♡」
頬がちゅ♡っと吸われている感覚。
まるでキュルちゃんにほっぺチューされてるみたいで一瞬喜んだけど、その

触手はすぐに頬を離れた。私の目の前でぷにゅっと二本に分裂して、するすると乳首に向かっていく。

「……はっ！　キュルちゃん！　そこは吸っちゃ――あひっ♡」

ぷにぷにの筒状触手が乳首の先にあたるや否や、ちゅるるっ♡と乳輪まで吸い込まれた。

「ひっ……ん♡　きゅ、キュルちゃん、吸うのダメ♡　くひっ♡　あっ♡」

キュルちゃんの体が透けているので、吸引された乳首が触手の中でぷっくりと膨らんでいるのが見える。

じんわり吸ったりぢゅうぢゅう吸ったり、緩急のついた吸引は、悪役令嬢を快楽堕ちさせるために生み出されたキュルちゃんの本能なのか。乳首の先からじわじわと快感が広がって、我慢しようと思ってもはしたない喘ぎ声が漏れてしまう。

クロードは椅子から身を乗り出すようにして、私が感じる様を舐めるように眺めている。こいつにとって、私は本当にただの実験台。キュルちゃんの触手に女体がどう反応するのか、冷静に観察しているみたいだ。

「ふむ……キュルベスター。お前の粘液には女性の感度を高める成分を配合してある。試しに粘液をかけて、乳首にすりこんでみるといい」

「キュルッ！」

「やっ、やだ！　粘液は駄目っ！　あっ♡」

キュルちゃんの筒状触手からこぽこぽと音が聞こえたかと思うと、触手の先端から透明な粘液がどぴゅっ♡と吐き出された。

ねっとりした生ぬるい液体が、私のおっぱいをにちゃりと伝う。それをキュルちゃんが触手の先っぽで乳首にぬりゅぬりゅっ♡と塗りこむと、シャンデリアの光で乳首がてらてら光って、すごくいやらしい見た目になっていく。

「あっ♡　キュルちゃん、こんなエッチなこと……っひ♡!?」
粘液を塗りこまれて十秒と経たないうちに、私の乳首を灼熱感が襲った。
「っい♡　あっ♡　こっ、これ駄目……っ♡」
さっきまでは乳首を弄られてもじんわりと疼きを覚える程度だったのに、今はまるで乳首と下半身が繋がってしまったかのよう。
キュルちゃんの粘液に配合された成分で感度があがり、さらに粘液のうるおいで触手がぬるっ♡ぬるっ♡と乳首の表面を滑ると、まるで両方の乳首に舌を這わされて、舐め転がされているような淫らな錯覚を覚えてしまうのだ。こりこりっ♡と乳首を弄られるのに合わせて腰が情けなくへこへこ♡と動くのをどうしても止められない。
そのうち、さっきの筒状触手がまたやってきた。粘液と一緒にじゅるるる♡と勢いよく乳首が吸い込まれて、さっきよりもぷっくりと勃起している。

きゅうぅ♡ときつめに吸われると、粘液で敏感になった乳首からつま先に向かって強烈な快感が走りぬけていく。

（なっ、なにこれ♡!?　乳首だけでイキそう……っ♡!?）

私の反応に手応えを感じたのか、黙って観察していたクロードの口角がにやりと持ち上がった。

「おや？　驚いたな。乳首だけでイキそうになっているのか？」

「いっ♡　ひぅっ……あっ♡　くうぅ……♡♡」

ベッドのシーツにつま先を食い込ませてイクのを耐えていると、筒状の触手の中を細い触手がしゅるしゅると伸びてきた。

「キュルー♡」

「きゅ、キュルちゃん？　筒の中、触手があっ♡!?」

筒の中をやってきた細い触手は、吸引されてピンピンに勃っている私の乳首

まで到達したかと思うと、触手の先でくりくりっ♡と乳首を弄り始めた。
粘液で敏感になっている上に、筒状触手の中でどこにも逃げられない乳首を、キュルちゃんの細い触手で的確に責められる。
乳首の先っぽをこしょこしょっ♡とくすぐるように弄られたかと思えば、勃起している乳首をぎゅっ♡ぎゅっ♡と押しつぶされたり。触手の先を左右に振ってこりこりこりっ♡と高速で責められると、イかないようにぎゅっと丸めていたつま先が小刻みに震えはじめた。
「ひゃあぁ♡　あひっ♡　すっ、吸いながらこりこりやめて♡　いっ♡――」
粘液の成分がすごいのか、はたまたキュルちゃんの乳首責めが上手すぎるのか、私はこらえきれず絶頂を迎えた。
「――っひぃ♡　イってる！　もうイってるから止めてぇ♡」
「キュルルー」

「――っはぁ……はぁ……♡」

キュルちゃんが触手を止めてくれても、粘液がまとわりついた乳首がじんじんと疼く。触手で縛られた両足は絶頂の余韻でガクガクと震え、オマンコの外にどろりと蜜が溢れる感覚がはっきりと伝わってきた。

「くくっ……良家の令嬢だというのになんて淫らな女だ」

「イッ♡　言わないでぇ……♡」

「乳首を弄られただけで達する女など初めて見たぞ？　この淫乱」

乳首だけでイクなんて、前世でも経験したことないのに。相当エッチな体じゃないと無理だろうと思うと、クロードの言う通り、今の私は淫乱で間違いない。実家を没落寸前まで追い詰めたメガネに嘲笑われて悔しい……！

「ううっ……」

「キュッ……キュル……」

私が悔し涙を浮かべていると、キュルちゃんが急におろおろし始めた。意地悪く笑いながら私を言葉責めしているクロードの姿に驚いているみたいだ。

クロードもキュルちゃんの動揺に気づいたのか、私をいじめるのをやめてキュルちゃんに優しい笑顔を向けた。

「キュルベスター、誤解しないでくれ。こういう言葉をかけると彼女に喜ばれるから口にしているだけであって、実際はそんな酷いことを心から思っているわけではない。その証拠にほら。ここが先程よりも蜜で濡れているだろう？」

「……キュルキュル!!」

（違うよー!?）

キュルちゃんまた「なるほど!!」みたいな反応してるけど！　あなたのパパはドSで言葉責めが好きなだけだから！　心から楽しんで私をいじめてるだけだからね!?

口をぽかんと開ける私を気にすることなく、クロードは私のクリトリスを指さしながらキュルちゃんに言った。

「キュルベスター―。次はここを遊んでやるといい。とても喜ぶ」

「キュルッ！」

たった今、初めての乳首イキを経験したばかりなのに、クロードのあからさまな誘導で、キュルちゃんによるクリ責めが始まってしまった……！

Ⅲ　クリを触手でしゅこしゅこ♡されて潮吹きました

「いやっ！　キュルちゃん、そこはやめてあっ♡」

私の制止は最早なんの意味もなく、キュルちゃんは一番細い触手の先っぽでこしょこしょっ♡と私のクリトリスをくすぐりはじめた。

「おひっ♡　ほぉっ♡♡」

「キュルルー♡」

乳首イキした余韻で体中が敏感になっていて、触手がちょんっ♡とクリに触れるだけで腰がビクンッと跳ねる。極細触手はクリトリスを包んでいる皮をきゅっ♡と器用に剥くと、無防備になった肉芽をつんつんっ♡とつついてきた。直にクリを弄られる強い快感に、嬌声が連続するのを止められない。

「おっ♡　おっ♡　おぉっ♡♡」

「ほら、とても喜んでいるだろう？　ここはクリトリスといって非常に快感を得やすい場所だ。ここだけで先程のように達してしまう者も多い」
「キュル、ちゃんっ……そこ、本当に駄目なの♡　ほぉっ♡　やめてぇ♡」
無駄だと思いつつもキュルちゃんに懇願する私を見て、クロードが眉をひそめている。
「おい君。誤解を招く言い方はこの子の教育に悪い。気持ちいいなら素直にそう言いたまえ」
「そっ♡　そんな……」
「キュルル……？」
「うっ……」
クロードの言うことを聞く気はさらさらない。けど、心配そうな顔でキュルちゃんに見上げられると、駄目だと思っていても平気な風を装ってしまう。

「う、うん。大丈夫……気持ち、いいです……とても」
「キュル―♡♡」
触手をくねくねと動かして喜ぶキュルちゃんがかわいい。ただ、今にも全部の触手が私を襲ってきそうだ。
「で、でもね！　そこは本当に敏感な場所だから。あんまりたくさん触っちゃ駄目なの」
「……キュルキュル!!」
（あっ。これ、ミスったかも）
キュルちゃんのさらに嬉しそうな反応。もしかして「たくさん触っちゃ駄目」イコール「たくさん触ってください」って思われちゃったっぽい？
「キュルちゃん！　逆じゃないの！　本当に駄目だから！　あっ……!!」
私が早口で弁解している間に、キュルちゃんの筒状触手がクリトリスに近づ

いてきて、びゅるるっ♡と粘液を吐いた。皮を剥かれたクリに透明な液体がねっとりと絡みついている。それをキュルちゃんが鼻歌らしきものを口ずさみながら、触手の先で丁寧に塗りこんでいく。

「キュルルルー♡　キュルルルー♡」

「あひっ♡　いやぁ♡　塗りこまないでっ♡」

「くくっ……君は実に扱いやすい女だな。どうだ？　乳首だけでイクほどなら、クリトリスに粘液をかけられれば相当な快感が襲ってくると思うんだが」

こうなることを予想していたのか、クロードは腹を抱えながら私に意地悪な質問を投げかけてくる。乳首だけで絶頂に達してしまう粘液をクリトリスに使われたらどうなってしまうかなんて、考えたくもないのに……！

「この悪魔っ！　ドSメガネ！」

「どえす？　初めて聞く単語だ。悪魔のようだとはよく言われるが……」

でしょうね！　こんなかわいいキュルちゃんの粘液にエッチな成分を配合するだけでなく、嬉々として試させるくらいだから。血も涙もないよね！

「――あっ♡!?」

クロードを睨んでいる最中。クリトリスにぴききと、今までにない感覚を覚えた。あわてて秘部に目を落とすと、私のクリが小指の先くらいにぷっくりと膨らんでいる。

「ひっ!?♡　何これ……っ!?」

まるで小さなおチンポみたいな形。包皮を押し上げるようにむきっと頭を出して、ビンビンに勃起している。

「ほう。クリトリスを肥大させる成分を入れてはみたが、ここまで大きくなるとは。感度はどうかな？」

「キュルル？」

キュルちゃんが首を傾げながら、極細触手をクリトリスの根元にくるんと巻きつけた。小さな輪っかを作り、指でおチンポをしごくようにしゅこっ♡しゅこっ♡と上下に動かされる。

「いぎいいぃ♡　イクッ♡　イグゥ♡♡」

強すぎる快感に、触手で縛られた体が弓なりに反り、全身から汗が噴きだす。ほんの数往復しごかれただけでクリイキしてしまった私を見て、クロードもキュルちゃんも楽しそうだ。

「なるほど。彼女はクリトリスを弄られるのが随分と好きらしいな。キュルベスター―。もっと弄ってあげるといい」

「キュルッ♡」

「はひっ……はぁ……きゅ、キュルちゃん？　その触手、何……？」

息を整える私にキュルちゃんが差し出してきたのは、筒状だけど乳首を吸っ

ていた触手と違って少し太い。
内側をよく見ると、細かいひだひだで内壁がびっしりと埋まっている。例えるなら、前世で見たことのある、しゅこしゅことおチンポをしごくオナホール。あれを私のクリトリスに合わせて細くしたような感じ。
そんな極悪触手で、かわいいキュルちゃんが私のクリトリスを今まさに襲おうとしている。
「ねぇ、嘘よねキュルちゃん？　私、そんなの無理だよ……!?」
制止も虚しく、クリ専用オナホみたいな触手は、小さいおチンポのようになってしまった私のクリトリスに向かっていく。粘液まみれのクリちんぽがすっぽりと飲みこまれたかと思うと、キュルちゃんが触手を動かしてしゅこしゅこ♡っとしごき始めた。
「いひゃあぁぁ♡!?　おっ♡　ほおおぉ♡」

あまりの快感に、私の目の前でバチッと火花が散った。
上下にしごかれる度にちゅぽっ♡ちゅぽっ♡と淫らな音が鳴り、内側の細かいひだひだが勃起したクリちんぽの表面をぞりぞりっ♡と撫でていく。
「キュル？　キュル？」
私に気持ち良いかとたずねるように、キュルちゃんが首を傾げている。かわいいけどそれどころではない。クロードに色々と吹き込まれたせいで、キュルちゃんは短時間でとんでもなくエッチなモンスターに成長してしまっている。
ついさっきクリイキしたばかりなのに、それを上回る快感の波が連続して押し寄せてきて、内腿がビクビクと震える。人間の手では絶対に与えられないクリ責めに、まったく我慢がきかない。
「いひっ♡　おっ♡　クリちんぽしゅこしゅこ♡　すごいぃ♡」
「キュルルー♡♡」

あっさりと快感に負けて素直に反応してしまうと、気をよくしたキュルちゃんがさらに責め手を強めてくる。まるでバキュームフェラみたいに、吸引されながらクリちんぽをしごかれ、ぢゅるるっ♡ぢゅぽっ♡と大きな音が鳴る。

「おひいぃ♡　吸うのだめっ♡　クリちんぽ大きくなっちゃうぅ♡♡」

前世で吸うタイプの玩具をクリに使ったことがあるけど、あんなものの比じゃない。悪役令嬢が即堕ちするはずだ。粘液で敏感になったクリちんぽをじゅるじゅる吸われながらしごかれたら、それだけでもうキュルちゃんの虜になってしまう……♡

「おほぉ♡　キュルちゃん♡　すごいのきちゃう♡　もうイクゥ♡♡」

「キュルキュルー♡」

私がイクのを促すように、触手の動きが一層早くなる。お腹の奥から激しい快感がせり上がり、一気に弾けるような感覚が私の体を襲った。

「おっ♡!?　ほおぉ♡!?」
腰がビクンっと大きく跳ねたかと思うと、足の間からぷしゃあぁぁ♡と透明な液体が噴きだした。
「キュルッ!?　キュルルー♡」
「ひいぃ♡　いっぱい出ちゃうっ♡♡」
私が潮をふくのを見て、キュルちゃんは初めて噴水を見たちっちゃい子みたいにはしゃいでいる。私を縛っていた触手も解き、ぷしゃっ♡ぷしゃしゃっ♡とふきだしている潮を触手でぱしゃぱしゃと触ってはキュルキュル鳴く姿がかわいい。
触手の支えを失った私は、足をM字に開いたままベッドに深く沈みこんだ。太腿がガクガクと震えて、恥ずかしいのに足を閉じられない。
（は、初めて潮吹いちゃった……♡♡）

すごく気持ち良かった……何より、キュルちゃんが楽しそうでよかった。ただ、クロードは顔をしかめている。

「ちっ。効果が確認できたのは良いが、私の服まで濡らすのはいかがなものか」

「あっ……申し訳、ありませ……」

「不快だ。すぐに脱がせてくれ」

「えっ？　は、はい侯爵様！」

奉公初日。ここにきてやっと侍女らしい仕事を命じられ、私はクロードの方にずるずると体を引きずった。

Ⅳ　ダメ侍女すぎて口におチンポねじこまれました

「早くしろ、のろま侍女」

「はいぃ……」

潮吹きの余韻で体が思うように動かないのに、クロードが容赦なく急かしてくる。それにしてもこのドSメガネ、こんなに偉そうにしてるくせに自分で服も脱げないのか。そう思うと少しだけ気分が晴れる。

ベッドの上から体を乗り出して、クロードが羽織っていた上着を脱がせる。そして私の潮で点々と濡れてしまったシャツのボタンをのろのろと外していると、キュルちゃんが私の足にまとわりついてきた。

「キュルー……」

私がクロードの方を向いているからなのか、キュルちゃんの鳴き声がなんだ

かつまらなさそうに聞こえる。
「ごめんねキュルちゃん。今ちょっと侯爵様の服をぉっ♡!?」
無防備になっていた私のオマンコに、キュルちゃんの細い触手が後ろからつぷっ♡と侵入してきた。すっかり濡れそぼっていた蜜道は触手を拒むことなく、ちゅぽっ♡ちゅぷぷっ♡といやらしい音を立てている。
「あぅっ♡　そっ、そんなとこ入ってきちゃ、だめ……っ♡」
「ああ、キュルベスター。彼女は処女だ。後日遊んでくれる令嬢も恐らくは処女なのでな。そこは少しずつ広げてから、太い触手を挿れてやるといい」
「キュルッ！」
またしてもクロードに言われるがまま、キュルちゃんは私の中に入っている触手をくるくると回して蜜道をほぐし始めた。柔らかい触手が蜜を絡ませながら、内壁を満遍なく押し広げていく。

「ひぎっ♡　広げないでぇ♡　おっ♡　ひいぃ♡♡」
「おい君、手が止まっているぞ。私が風邪をひいたらどうする」
「はっ、はひっ♡　もうしわけ♡　ありませっ♡　あっ♡」
細い触手がもう一本増やされ、私は脱がせかけていたクロードのシャツから手を離してベッドに手をついた。
四つん這いになってしばらく耐えていたけど、キュルちゃんの柔らかい触手が中でバラバラに動き、上半身を支えていた両腕からカクンと力が抜けた。
突っ伏すように体がペシャンと崩れ、高く上がったままのお尻が快感でビクビクと震える。
「ひっ♡　おっ♡　オマンコくちゅくちゅ、だめっ♡♡　ほぉっ♡」
ベッドに額を擦りつけるようにして喘ぐ私を見てか、クロードの溜息が聞こえてきた。

「はぁ。使い物にならん侍女には仕置きが必要だな」
「な、何を……ひっ!!」
ベッドに上がってきたクロードがトラウザーズの前をくつろげると、私の目の前に太いおチンポがぶるんっ♡と現れた。クロードの白い肌からは想像もつかない、赤黒くてグロテスクな見た目。太い茎には血管が浮き出て、どくどくと脈打っている。
「キュルベスター、こいつの口を開かせてくれ」
「キュルッ！」
「キュルちゃんやめ……あがっ！」
私の口にキュルちゃんの触手が侵入して、歯列をぐるりと一周するように覆われた。触手が邪魔で口を閉じられない。
「おお、さすが我が息子。ありがとう」

「キュルルー♡」
クロードに撫でられて、キュルちゃんがものすごく得意げな顔をしている。褒めて伸ばすタイプのパパと喜ぶ息子（触手だけど）。本来なら微笑ましい光景なのに、今からクロードのいきり立ったおチンポを口の中に突っ込まれるんだろうと思うとにやにや眺めることもできない。
「さて、仕置きの時間だ」
クロードは淫茎に右手を添えると、私の口の中へ一気にねじ込んだ。
「んうっ!?」
触手で覆われた歯はクロードを傷つけることなく、熱く滾った肉棒がずぬぬっ♡と喉まで入ってきた。息が、苦しい……！
「んぐぅっ……！」
「くくっ……こいつはいい。最高だ」

クロードはこれ以上楽しいことはこの世にないみたいな顔で、私の口に根元までおチンポをねじこんでいる。そのうち、私の後頭部にクロードの手がやってきて腰を前後に動かし始めた。

「うぐっ……んむっ……ふむぅ……♡」

喉奥を突かれる度に息が詰まって苦しい。それなのに、口の中に広がるいやらしい味と雄の匂いのせいなのか、頭がぼうっとする。そこに後ろからキュルちゃんの責めが加わると、どうしてもうっとりした顔になってしまう。

「おや？　こんなことをされているのに感じているのか？」

「んうっ！　じゅるっ♡　ふうぅっ♡」

文句を言おうにも、おチンポで口を塞がれてしまっては言葉にならない。

体の中に入っている触手はいつの間にか三本に増え、さっきからずっとGスポットの辺りをトンッ♡トンッ♡と刺激されている。潮を吹いてしまった時と

同じ感覚が、お腹の奥からじりじりとせり上がってくる。
　クロードのお仕置きとキュルちゃんの触手に耐えていると、キュルちゃんがもにゅにゅっとクロードの隣まで移動してきた。
「どうしたキュルベスター」
「キュル、キュルル？」
「ああ。そういえば人間の男性器を見るのは初めてだったな。説明しよう」
「ぷはっ！　はぁ……はぁ……！」
「これが人間の男性器だ。普段はしぼんでいるが、性的な興奮を覚えるとこうして硬く勃起して、女性器への挿入が可能になる」
「キュルキュル……！」
「それから人間の繁殖行動だな。男性器を女性器の中に挿入して、擦るように前後に動かすことで男性器が刺激され……」

よし！　唐突にクロードパパの性教育タイム始まった。キュルちゃんの触手も止まってるし、この隙にたくさん息を吸って次の責め苦に備えよう。

しかし、ふとキュルちゃんの方に視線を向けた途端、私の呼吸はヒュッと止まってしまった。

「キュルー……キュルルッ！」

「ひっ!?　えっ!?」

細かったキュルちゃんの触手が一瞬でズンッと太くなった。それだけじゃない。目の前にあるクロードのおチンポとそっくりに形を変えている。笠みたいに張り出した先端も、浮き上がった血管も見事に再現。これにはクロードも驚いたのか、目を丸くして拍手を送っている。

「素晴らしい！　我が息子は本当に天才だな」

「キュルルルー♡♡」

やめてクロード。これ以上キュルちゃんを褒めて伸ばしてはいけない。そのご立派なおチンポ型触手、まさか私に突っ込んだりしないよね……？

冷や汗をかいていると、クロードと目が合った。整った唇が意地悪そうにぐにゃりと歪む。

「……キュルベスター、もう十分に慣らしただろう。それを先程の穴にいれてやるといい。とても喜ぶぞ」

「キュルッ！」

「やめてやめて！　そんな太いの入らないっ!?♡♡」

じっくりとほぐされていた蜜道におチンポ型触手をずぶっ♡と突き立てられ、私は一瞬意識を失った。

V　どちらの処女も触手に奪われちゃいました

「――っ♡　あ――……♡♡」

一瞬、目の前が真っ白になって、そこからぼんやりと視界が戻ってきた。

さっきまで執拗にGスポットを刺激されていた私は、潮を吹きながらイってしまったらしい。太腿をさらさらした液体が伝っている。

「キュルルー♡」

「おや？　処女のくせにひと突きでイったのか？　まったく、潮まで吹いて。君はどこまでも淫乱な女だな」

「あへっ♡　おほぉ……♡」

クロードが何か言っているけど、頭がぼんやりとしてよくわからない。私の反応が鈍いからか、キュルちゃんの心配そうな声が薄っすらと聞こえてくる。

「キュルッ!?　キュルル……？」
「ああ、大丈夫だ。こうすれば元に戻る」
「――んっ!?　んぅぅっ♡」
だらしなく開いていた口にクロードの淫茎を突っ込まれ、途端に視界がはっきりした。こんな起こし方、悪魔も真っ青だ。
「んぐっ……んむうううぅ!!」
「ほらな？　問題ないので続けるといい」
「キュルッ！」
口はクロードのおチンポで塞がれ、オマンコはキュルちゃんのおチンポ型触手でみっちりと埋められている。四つん這いで前後を挟まれて逃げられない私を、ふたりとも容赦なく責めはじめた。
クロードにごちゅん♡ごちゅん♡と腰を打ちつけられ、息が詰まる。たまら

ず体をひくと、後ろから攻めているキュルちゃんの触手がオマンコの奥にどちゅっ♡と当たって悶絶してしまう。

しかし触手の快感から逃れようと前のめりになると、またクロードのおチンポを喉奥まで飲みこんで息が詰まる。延々とその繰り返しだ。

「おい君。ちゃんと舌を使え」

「キュルッ♡　キュルッ♡」

「んっ♡　んむぅ♡　ふうぅ♡」

息苦しくて涙目になりつつも、キュルちゃんの触手が子宮口にごりゅっ♡と当たる度に、意識が飛びそうなほど感じてしまう……♡

（サンプル版　おわり）

サークル名
NatsuMina Novel

ペンネーム
Mina Natsumori
（奈津森 実菜）

筆者より

サンプル版をお読みいただきありがとうございます！

読む人が主人公になる作品を書いてみようとネタを溜めてあったのですが、いよいよフォルダが散らかってきたので、『〇〇×あなた乙女ノベル』と題しまして、まずは大好きな触手のお話を書いております。

二～三万字程度、えちえちなシーンに重きを置いた乙女ノベルになると思います。もしお好みに合いましたら完成版もよろしくお願いします！